



ネワール語におけるWAYE(くる)のスキーマと意味拡張 (西光義弘教授還暦記念号)

松瀬, 育子

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:131-141

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001530>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001530>



ネワール語におけるWAYE (くる)のスキーマと意味拡張

松瀬育子

慶應大・東工大非常勤講師

1. はじめに

日本語では、ネワール語に比べて、天候、特に降雨を表す表現で動詞を細かく区分する。雨・雪が降る、風が吹く、霧が出る、霏がかかる、露・霜が降りるなど、主語名詞の属性によって使われる動詞が変わるが、ネワール語ではこれらの自然現象を表す場合、直示移動動詞 waye (くる)一語で済む¹。日本語でも、一雨きた、台風がきた、と言えるが「くる」で表す降雨現象はそれほど多くない。

本稿では、直示移動動詞 waye (くる)が、本動詞として位置変化だけでなく、降雨現象も表し、さらに生理現象の発生、暗記の意味も表すことを観察する。人間の内的状況を描く場合でも、感覚の表出、感情の発露などでは waye を用いず、別の動詞を使うことから、ネワール語では自己の内的状況を表す場合、waye のスキーマを用いて表せる状況とそうでない状況を分けていることになる。本稿ではこうした waye が本動詞として表れる言語現象を、移動のイメージスキーマに基づき、スキーマ内の要素の属性がプロトタイプのな広がりを見せ、その使用領域が拡張されていることを見ていく。

2. ネワール語の直示移動動詞と waye の用法

ネワール語の wane (行く)と waye (来る)は本動詞、補助動詞として機能するが、本稿では本動詞用法に焦点を当てて観察を行う。(1a,b)にあるように、ネワール語の移動表現では話者の位置を基準にした wane と waye が最も多く使われる。wane が話者から遠ざかる移動を表し、waye は話者に近づく移動を表す。これは、直示の場所副詞 thana~ (ここから)が wane と矛盾なく結びつき(1a)、thana (ここへ)が waye と結びつくことから説明される(1b)。

- (1) a. Rāma~ ghwa:chi bikā: thana~ isuku:l-e wana.
 Ram.ERG one hour give.CAUSE.CP here.ABL school.LOC go.PD
 ラムは一時間かけてここから学校へ行った
- b. Rāma ghwa:chi bikā: thana wala.
 Ram.ERG one hour give.CAUSE.CP here come.PD
 ラムは一時間かけてここにきた

ところが、移動表現での無標・有標性という観点から見ると wane と waye は同等ではない。

- (2) a. Nyāsi-wane-gu mha-yāta nii.
 walk-go.NPC-NM body-DAT good
 歩くことは健康(体)に良い

b. Ji~ nyāsi-wa-wa~ curota twanā.

I-ERG walk-go-REDPR tobacco drink-PC

私は歩きながらタバコを吸った

c. Thwa la~ ni-mha nāpa~ wane ma-phu.

this road two-CL together go-NPC be NEG-possible-ST

この道は二人並んで進めない

(2)の各例に示されるように、話者の位置という点を考慮に入れず、単純に前方への移動・進行を表す場合は *wane* が用いられることから、*wane* が移動動詞に関して無標と言える。

継続性に関しては、*wane*, *waye* とも (1a,b)の *ghwa:chi bikā:* (一時間掛けて)や、*nhi-chi bikā:* (一日掛けて)と言った巾のある時間副詞表現と共に起することから、両方とも継続性を持つことがわかる。一方、限界性については、着点への到達性において *wane* と *waye* が平行ではなく、(3a)(3b)の容認性の違いから *waye* のみが限界性を持つことが説明される。

(3) a. Thau~: sutha-e rāma ste:shan-e pakhe wanā: tara ana ma-thya:.

today morning-LOC Ram station-LOC toward go-CP but there NEG-arrive-ST

ラムは朝駅に向かって行ったが、着かなかった

b. *Thau~: sutha-e rāma thana wayā: tara ma-thya:.

today morning-LOC Ram here come-CP but NEG-arrive-ST

ラムは今朝ここに來たが、着かなかった

このように、ネワール語では *wane* と *waye* に有標性と到達点への限界性で差があるので、これらを(4)のようにまとめることができる。

(4) *wane* (いく) : ① デフォルトとしての方向内在的移動動詞 (前方移動)

② 話者位置からの出発 (話者が導入された場合)

③ 継続的移動

④ 限界性はオプション

waye (くる) : ① 話者位置への移動 (話者が導入された場合)

② 継続的移動

③ 限界性

wane と *waye* は、話者という基準位置が導入されて始めて、逆の移動方向と対立概念が生まれることになるが、話者の関心が *wane* と *waye* に等しく注がれるというわけではない。話者位置が着点である *waye* は、何かが自分のところに来ることにに関して無関心ではいられず、また移動物が話者に与える影響についても考慮しなければならないといった観点が前景化される。去るものよりも自分のところに来るものに対して高い関心を示すことは、話者位置が *deictic center* として認識され、注意が注がれることになる。従って、その動詞を用いて移動事象以外の出来事を表すのに拡張されたとしても特異なこととは言えない²。ネワール語では移動表現の他に、本動詞として自然現象の到来、生理現象の発生、記憶の焼付けなどの状態変化を意味する。次節以下でそれらの用法を観察する。

3. 自然現象の到来 (意味拡張 I)

1 節でも触れたように、降雨に関する動詞に専ら *waye* (くる)が用いられる(5)。

- (5) a. Thau~kanhae wā wai-gu i: kha:.
 These days rain come-NPD-NM season copula
 今は雨の降る季節です
- b. Wā-phae waye phu.
 rain-wind come-NPC possible-ST
 嵐がくるかもしれない
- c. Ciku-lā~ swaniga:l-e taska~ khasu wa:.
 cold season.INST Kathmandu valley.LOC very fog come-ST
 寒い季節にはカトマンズ盆地でたくさん霧が出る

こうした自然現象は、wā (雨)の他に、cwāpu (雪)、phae (風)、khasu (霧)、situ (霪)などがあり、動詞には全て waye が使われる。ただし、「地震がきた」場合は bhukhāe: bwala. と、別の動詞 bwaye が使われる。waye は話者位置への移動を表すが、移動軸が上下であってもなんら問題のないことは、Rām thahā~: wala. (ラムが上に来た)、Gitā kune wana. (ギタが階下に行った)が通常の移動表現として容認される点からもわかる。では(5)のような例を、よく引き合いに出される、空間領域から時間領域へのメタファー的投射の一種として扱っていいのだろうか。例えば「春がきた」「夜がきた」では空間領域から時間領域への投射と呼んでも差し支えないと思われるが、ここでの自然現象は時間的な参照点を含んでいない。物理的な移動と本節で扱っている自然現象の到来の違いは3点あると思われる。移動物が人間や乗り物などといった典型的で具体的な実在ではない点、移動の方向が上下に限定される点と、着点句 thana (ここに)の付加が不自然な点である。移動物の属性については、人間・動物など意図的にかつ移動手段を備えた自律的な実在(propelling force)が典型的な移動物として考えられる。雨・風などの自然現象には意図性が備わっていないが、それ自体エネルギーを持った可動な存在としての特徴を持つ。移動方向の限定性は上でも述べたように移動表現として何ら問題はない。着点についても、話者位置だけではなく、話者を含む地域に広げていくことが可能で、(5)の例文で、thwa thāse (この地域)、あるいはもう少し範囲を広げた swaniga:l-e (カトマンズ盆地に)を付加することができる。こうした移動物、着点領域の拡大が何に基づく意味拡張なのかは次節の現象を見た後で考察してみたい。

4. 生理現象、感情・感覚表出 (意味拡張 II)

動作的状況と異なり、内的状態を表す状況は1人称主語で与格をとり、意味役割上は経験者格となる。感情、感覚、生理作用の表現ではこの与格経験者が表れるが、どのような動詞が使われるのかを見ると、この3つのグループではっきりと境界が引かれる。生理作用を表す場合は(6)に示されるように、waye (くる)が圧倒的頻度で使われる。(7)に内的状態を表す動詞を分類する。

- (6) a. Jita kai wala.
 I.DAT pimple come.PD
 にきびがでた
- cf. Jigu khwāl-e kai wala.
 my forehead-LOC pimple come.PD
 私の額ににきびがでた
- b. Jita musu wala.
 I.DAT cough come.PD
 咳が出た
- c. Jita hachi~ wala.
 I.DAT sneeze come.PD
 くしゃみが出た

- (7) a. 生理現象 : kai waye にきびがでる、musu waye 咳が出る、hachi~ waye くしゃみがでる
 lā: waye 涎が出る、jwa:r waye 熱が出る、cati pihā~waye 汗がでる、
 nhi: waye 鼻水がでる、nhyā: waye 眠気がする(くる)、wākā: waye あくび
 がでる、khwabi waye 涙がでる、dhakā waye げっぷが出る、
 b. 感情 : aju: cāye/tāye 驚く(びっくりする)、gyāye 恐れる(恐ろしい)、
 lāe-tāye 喜ぶ(うれしい)、nuga: machine 悲しむ(悲しい)、ta~ waye/ta~ pkāye 怒
 る、ludhane 満足する(食事)、mhāipuye 退屈だ、nhāipuye たのしい、
 c. 感覚 : cāsuyē (辞書に cāsu waye (=to scratch) 掻く(行為))かゆい、syāye 痛い、
 cikuye 寒い、tā:nwaye 暑い、naye pityāye おなかがすく、tyānuye 疲れる、lāi-lāi
 cāye いらいらする、

(7a)の生理現象を表す動詞に waye が使われていて、(7b)の感情動詞と(7c)の感覚動詞ではそれぞ
 れ個別の動詞が使われるか、cāye/tāye (感じる)といった動詞で表されている。興味深いことに
 日本語の動詞を見ると、生理現象を表す場合は圧倒的に移動動詞「でる」が使われている。(日
 本語の「出る」については7節で言及する。)

ちなみに感情表出を表す「泣く」「笑う」動詞は、(8a,c)にあるように主語に絶対格を取り、
 活用形も1人称で conjunct 形をとるので、内的状況と言うより、動作動詞として扱われている
 と見ることができる³。さらに「泣く」「笑う」では、動詞連続の形で後項動詞に kyene (見せる)
 を続けることができ、ふりをする動作を指している(8b,d)。

- | | | | |
|----------------|---------|------------------------|---------------|
| (8) a. Ji | khwayā. | b. Ji~ | khwayā-kyenā. |
| I.ABS cry.PC | | I.ERG cry.CP-show.PC | |
| 私は泣いた | | 私は泣いて見せた | |
| c. Ji | nhilā. | d. Ji~ | nhilā-kyenā. |
| I.ABS laugh.PC | | I.ERG laugh.CP-show.PC | |
| 私は笑った | | 私は笑って見せた | |

(7a)の生理現象を表す動詞群で、1人称与格名詞と動詞 waye が表れる。さらに活用形では
 disjunct 形が使われるが、これら3つのグループの特徴をはっきりさせるため、次の点を調査す
 る必要がでてくる。

- (9) ①副詞 athe~, macāeka (ひとりでに), chu~ mayāsā~ (何もしないのに)をとれるか
 ②場所格が取れるか
 ③使役形に変換できるか、できるとすればどのような意味になるか

(9)①によって、その内的事態が話者のコントロール外(自発的)であるかどうかを確認できる。
 (9)②では、移動動詞としてのスキーマを保持しているかどうかを確かめることができる。ただ
 し、どの動詞も jita (自分に)と与格をとるので、場所格が容認されるとすれば、与核名詞句に代
 わって話者の体の部位を特定することになる。(この点については補足説明が必要であり、注⁴
 に添える。)名詞と動詞の関係で体の部位を特定できるような場合は、場所格を付加することで
 剰余性が生じ、表現の自然さを損なうことも予想される。(この点については表一1の後の説明
 で触れる。) (9)③は(9)①の項目と矛盾するように見えるが、形態的にはどの自動詞にも使役接
 辞を付加することができる。従って、1人称主語に使役形態素を付加することによって、どの
 ような使役状況であるかを知ることができる。こうした点を調査し、表一1にまとめる。

表一 1 : 生理現象・感情・感覚動詞の付加要素の容認度

	①ひとりでに	②場所格(奪格)	③使役形の意味
kai waye にきびがでる	○	○	waekā-cwanā (放置)
musu waye 咳が出る	○	×	waekā-cwanā (放置)
hachi~ waye くしゃみがでる	○	×	hachi~waekā (上をみて操作)
lā: waye 涎が出る	○	○	waekā-cwanā (放置)
jwa:r waye 熱が出る	○	×	jwa:r waekā (原因あり)
cati pihā~waye 汗がでる	○	○	ca:ti waekā (原因あり)
nhi: waye 鼻水がでる	○	○	waekā-cwanā (放置)
nhya: waye 眠気がする	○	×	nhya: waekā (原因あり)
wākā: waye あくびがでる	○	×	waekā-cwanā (放置)
khwabi waye 涙がでる	○	○	khwabi waekā (放置)
dhakā waye げっぷが出る	○	×	dhakāwaekā (整腸剤で操作)
aju: cāye/tāye 驚く(びっくりする)	×	×	aju: tāekā (程度の増大)
gyāye 恐れる(恐ろしい)	○	×	gyākā-cwanā (保持)
lāe-tāye 喜ぶ(うれしい)	×	×	lāe-tāekā (程度の増大)
nuga: machine 悲しむ(悲しい)	○	×	machi-kā-cwanā (保持)
ta~ waye/ta~ pi-kāye 怒る*1	×	×	ta~ pikāeke-biyā (程度の増大)
mhāipuye 退屈だ	○	×	mhaipikā-cwanā (保持)
nhāipuye たのしい 増大)		×	nhāipukā (程度の増大)
cāsuye かゆい*2	○	○	casukā-cwanā (状態保持)
syāye 痛い	○	○	syākā (状態保持)
cikuye 寒い	○	×	cikuikā-cwanā (状態保持)
tā:nwaye 暑い	○	×	tāekā-cwanā (状態保持)
naye pityāye おなかがすく	○	○	pityāekā-cwanā (状態保持)
tyānuye 疲れる	○	○	tyānukā-cwanā (状態保持)
lāi-lāi cāye いらいらする *3	○	○	lāi-lāi cāyā のみ

*1 「怒る」には ta~ waye, ta~ cāye, ta~ pi-kāye などいくつかの動詞が使える。

*2 cāsuye (かゆい)に関しては興味深いことが分かる。動詞語幹の cāsu を名詞として waye を後続させて cāsu waye とすると、「かゆい」ではなく「搔く(行為)」を表す。これは隣接性に基づく意味拡張メトニミーの一種と思われる。かゆいと感じることと無意識的に搔く行為は刺激—反応のように密接に関係していて、時間的隔たりがほとんどない。元々時間的に先行する出来事を指す動詞で後続する出来事を指し、意味も先行の出来事(移動)から後続する出来事(行為)を表すようになった事例と考えられる。

*3 lāi-lāi cāye 「いらいらする」は感情を表す動詞に入れた方がよいのかもしれない。

表一 1 の結果から、次のことが言える。(9)①の athe~, ma-cāeka (ひとりでに)の付加は、生理現象・感情・感覚動詞全てにあてはまり、こうした内的状況が主語のコントロール外の、非意図的な作用として認識されていることが確認される。

(9)②の場所格の付加は、生理現象を表す動詞のうち、にきび、涎、汗、鼻水、涙で可能となる。上の表では 1 人称与格を用いて経験者を表したので、その現象が現れるのは話者自身であるが、さらに現象の部位を場所格で表せるものがいくつかあることになる。waye に前置される名詞によってその現象が全身に及ぶものか、それとも体の一部に出るものなのかは知識として

承知しているので、全身に及ぶ現象では場所格を補充すると文に不自然さが出るとの予測が立つ。事実、熱は全身に及ぶ症状なので場所格が取れない。また、眠気のようなものも頭部に出るとは言いにくく、場所格を取るのが難しいと言える。咳、くしゃみ、あくび、げっぷなどの場合の表出部位は口・鼻と特定できるので場所格を沿える必要はないと思われる。ところが、中には、名詞によってその現象が表れる部位を特定できるものであっても場所格が許容されるものがある。涎は普通、口から出るものだし、鼻水も鼻からでて、涙も目から出る。日本語でも「目に涙を浮かべている/貯めている」と言えるので、名詞で部位が特定できるのに場所格を付加することが可能な場合は、場所格の剰余性だけの問題ではないと思われる。通常の「良し」とされる状況と異なる場合は、その特異さから場所格の付加が許容されるなど、別の要因も関係すると思われる。

場所格の付加が生理現象の動詞と感覚動詞の多くのもので可能であるが、感情動詞では許容されない⁵。感覚動詞では部位を特定する名詞が前置されないので、「痛い」「かゆい」などの局所的感覚を場所格を用いて表す。場所格を付加することができる点で、生理現象動詞と感覚動詞は連続していることになるが、元々感覚動詞では表出される「実体」というものがない。ただし場所格で感覚部位を特定することはできる。「疲れる」場合も動詞一語だけであるが、全身疲労だけでなく、部分的に *tuci-i tyānuye* (足が疲れる) はよく体験することである。従って、場所格の付加については、生理現象と感覚動詞で可能となるが、意味の違いは、表出される実体があるかないかで分けられることになる。

(9)③の使役形態素の付加については議論が必要となる。Hargreaves (1991)ではネワール語の使役形態素-kの用法を2つに分け、項を増やす *effective causatives* と意図動詞化する *affective causatives* に区分した。つまり、項を増やさずに意図性のみを付加する用法が-kにあることを指摘した。Kiryu (2001)はHargreaves (1991)の区分をさらに細分化し、これら2つの他に、“the event which is observable by others (他人から見た様子)”, “a sub-event involved in or accompanied by the main event (同伴行為)”, “a transitive event which is directed toward others, not to the agent (他者への着衣行為)”を加えた。表一1に表れる-kの用法では、さまざまな感情・感覚表現で1人称与格主語に-kの付加が可能なことから、Kiryu (2001)の「他人から見た様子」という説明では不十分であることになる。また、-kā cwanā という動詞連続が可能なことから、「同伴行為」が、移動動詞だけではなく、cwane (いる)といった存在動詞が後続する動詞連続にも起こることが明らかになる。従って、生理・感情・感覚のような内的状態を表す動詞では、-kの付加が、その現象を起動させるといった動作主の導入というより、むしろ生理現象の放置、感情の程度の増幅、感覚の保持と言った、「同伴性」に関わる用法が主となると思われる。ただし、表一1の生理現象の中には、現象の発生に刺激を与えるような動作を表すものもある。感情・感覚動詞では、waye とは異なる動詞が使われているが、状態の保持に関しては同じ範疇として認識されると言える。

このように、表一1の3つの動詞群はそれほど際立った違いを見せるものではなく、3動詞群とも制御不可能な内的現象を表す。場所格付与については、自分の体を具体的な形(実体)で現象が生起する場所として捉えることと、感情のように、具体的な実体を示さない場合は場所格を取りにくいこと、また、局所的な感覚の場合は場所格を必要とすることが明らかになった。さらに使役形態素の付加では次のような意味が発生する。すなわち、生理現象の動詞では、その現象を誘発する行為を表すものとその現象を放置する意味に分かれ、感情動詞では増幅された状態を表し、感覚動詞では状態保持を表すことになる。

5. 記憶の焼付け (意味拡張 III)

waye にはもう一つ、記憶の焼付けを表す用法があり、「暗記」を表す名詞 *ka~tha* とセットになった形で使われる。動詞は *waeke* と使役形になる(10)。

(10) a. Ji~ pāda ka~tha waeke-dhuna.

I.ERG lesson learn-by-heart come.CAUSE.NPC-finish.PD.

私はその課を暗記した

b. Jā~ca nhya: pāsā~ jita nyana. ‘dakwa~ ka~tha waekā lā.’

exam before friend.ERG I.DAT ask.PD all learn-by-heart come.CAUSE.PD Q

試験の前に友達が尋ねた「全部覚えたか」

この暗記の用法では、主語は能格で表示され、制御的な行為を表す。場所格を付加することはできなく、例えば *chya~e* (頭に)などを挿入することもできない。別に *luma~ti yāye* (記憶する) という動詞があるが、*ka~tha wae-ke* は単に記憶するだけでなく、記憶に刻み込み、それを取りだせるように準備する段階までを表す。

6. 理論的考察 (スキーマと拡張)

以上、*waye* (くる)が話者位置への移動の意味とともに、降雨、生理現象、記憶の焼付けを表すことを見てきた。これらの意味拡張について、スキーマを用いた説明を試みる。

Johnson (1987:28)では移動の *path schema* を次のように図示している。

図一 1 : Path schema by Johnson 1987:28



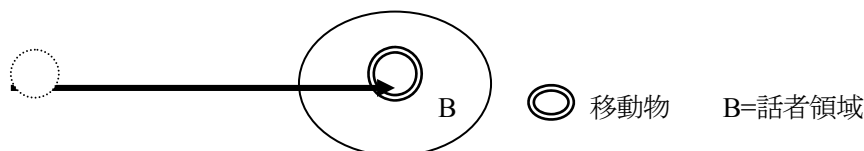
Johnson の説明では、典型的なスキーマは *parts* と *relations* を持ち、*parts* は人、属性、出来事などいくつかの *entity* の集合からなり、*relations* は、使役関係、時間関係、全体一部分の関係などを構成する。この *parts* と *relations*、すなわちスキーマは、ある場所から別のある場所へ歩いていくことや、ボールを誰かに投げたりすることや、あるいは誰かに何かをあげたりすることも表し、高い一般性(普遍性)と抽象性を持つとされる。その普遍性・抽象性のために、例えば「歩く」と「投げる」と「やる」と言った語彙項目の意味をどのように区別して表示するかについては言及されていない。それぞれの語彙が意味する具体的な区分については別の説明を待たなければならないが、イメージスキーマから導き出される視覚的認識は移動表現の本質を捉えていると言える。

一方、Talmy (1985, 1991)は、移動事象には Motion, Figure, Path, Ground, Manner/Cause の要素が関わると規定し、世界の言語を *verb-framed language* と *satellite-framed language* に類型した。さらに、Talmy (2000-II:53)では経路概念の多様性に着目し、経路を構成する下位要素として *Vector* (経路局面), *Conformation* (位置関係), *Deictic* (直示)があることを示した。「経路局面」によって FROM/VIA/TO の概念が明示され、「位置関係」によって基準位置・基準物との相対的位置関係 IN/ON/AT/OFF が明示され、「直示」によって話者のいる位置を基準とする方向性が明らかになった。

このようにして、実際の移動を構成するものとして移動物、移動の経路、経路を規定する基準位置・基準物の3つがあることが明らかになった(松本 2003, 2005)。この3つの要素は上で見た Johnson (1987)のスキーマの中にも含まれることになり、ズームレンズの手法で *path* に迫ると Talmy が区分した経路の要素がプロファイルされることになる。移動物についても典型性という観点からみれば段階性を示すことが予想される。

本稿で論じている waye はこの path のうち「直示」がプロファイルされ、移動物が話者位置に至るという意味を持つ。図一1 を詳細化して移動物と着点を明示した waye 固有のスキーマを描くと、図一2 のようになる。

図一2 : waye のスキーマ



図一2に描かれた二重丸の移動物は、典型的な属性として、有生で、意図を持ち、可動な力を持った entity が想定される。また、移動の結果として有形の実体が存在するという有形性も加えられる。これらの属性はプロトタイプの広がりを持ち、典型的なものは人間の意図的移動である。有生物の物理的移動は、有生性、意図性、有形性、可動性を持ち、自然の力は有形性、可動性を保持し、エネルギーを内在する現象は可動性を保持すると想定される。

一方、経路の着点である話者位置も典型性（近接性のメトニミーと見ることも可能）を薄めることによってその領域を広げていくことができる。話者という局所的な位置を維持しながら、一方では話者位置を含む「地域」に広げることでもでき、また一方では、話者の体を基準にしてその内部・表面に生起する現象の「発生場所」と縮小化することもできる。その現象の発生場所が、体表あるいは体内からの放出物であるときは container metaphor が働くことになる。

従って、移動(表現)はイメージスキーマを起点として、3つの構成要素から成り、さらに使役関係という広がりを持つ複合事象と言える。ネワール語の waye では、スキーマから導き出された移動物の属性をプロトタイプとして捉え、その属性を段階的に薄めることができるが、移動物が到達したという証拠(影響)が目に見える形で認識される「有形性」は保たれることになる。経路についても、方向・着点である話者位置を中心に、近接性に基づいてその範囲を地域に拡大したり、逆に話者自身の体内・体表に向かう方向にも縮小できる。

このように、イメージスキーマを維持しながら、構成要素をプロファイルし、典型性を薄めたりメトニミーを用いたりして意味拡張する。記憶の焼付けについては、そのプロセスが複合的で、知識を移動物に見立て、話者自身の記憶装置に移動物を到来させ、さらにそれを表出させるという使役の力動性に基づいて意味拡張を成し遂げる。この複雑な意味拡張には、当然、制約が伴い、ka~tha wae-ke という複合表現でのみ可能となる。

7. 日本語の「でる」との比較

今泉・郡司 (2002)に「出る」と「出す」についての興味深い分析がある。今泉・郡司 (2002)によれば、(11)(12)に現れる「出す、出る」の用法は「月が出る、作品が世に出る」等の単純事象を起点に、受動化と潜在化のプロセスを経て生成される。元々の起点にある「でる」には語彙概念構造 [BECOME ([BE ([4] , OUT)))] が存在する。意図的ではない(11a,b)の「出す」は、この概念構造から、受動的意味関数 AFFECTED (影響を被る)を持つ意味構造として生成され、外項と内項をもつ。これは、(11a,b)の主語が目的語と同一存在であり、かつ意図性が関与しないという関係から影響性が引き出されるということである。(12a,b)の「出る」では AFFECTED の第一項が語用論的に同定され、統語的な項にならないことから、潜在化のプロセスを踏むと説明されている。

(11) a. 健が額から血を出している。

- b. 子供が風邪をひいて熱を出している。
 (12) a. 額から血が出ている。
 b. 風邪をひいて熱がでている。

(12)が、本稿で論じている生理現象の発生と同じ意味構造を持つと思われる文である。(7a) で分類したネワール語の生理現象を表す表現と日本語の対応表現を下に再出する。

- (7) a. 生理現象 : kai waye にきびがでる、musu waye 咳が出る、hachi~ waye くしゃみがでる
 lā: waye 涎が出る、 jwa:r waye 熱が出る、 cati pihā~waye 汗がでる、
 nhi: waye 鼻水がでる、 nhya: waye 眠気がする (くる)、 wākā: waye あくびが
 でる、 khwabi waye 涙がでる、 dhakā waye げっぷが出る、

議論の出発点が異なるので、今泉・郡司 (2002)が前提としている、単純事象を表す「出る」が生理現象の「出る」のプロトタイプであるという点は、ここでは問わないことにする。しかし、生理現象を表す際、日本語で「出る」が使われ、一方ネワール語で waye が使われることは偶然とは言えない。本稿の枠組みでは、「出る」の基本に移動のスキーマがあり、そのスキーマに基づいて(12)の生理現象の表現がなされ则认为。「血が出る」ことを皮膚を傷めた結果の生理的な現象と捉え、スキーマの拡張の際に、体の表面が一部破損して中に含まれていたものが外に出るといった container metaphor が発動される。日本語の生理現象の表現ではスキーマの拡張だけではなく、メタファー的投影がなされることになる。

使役動詞「出す」を用いた(11a,b)では、意図的な使役移動を「出す」の典型と規定すると、主語と目的語が同一であることから全体一部分の関係がプロファイルされ、典型である意図性が消えることになる。ここでも container metaphor は保持される。

両言語とも、移動動詞、すなわち移動のスキーマを用いて生理現象の発生を語彙化するという点で同じ概念化方略が取られる。そして経路のどこをプロファイルするかに関してレベルが異なる。日本語では経路のうち、「位置関係」のレベルの IN/OUT がプロファイルされるが、ネワール語では「方向関係」のレベル、話者位置への到達がプロファイルされると言える。

これまでの議論では、語彙(動詞)の用法の拡張と、出来事を表現する際に使用される動詞の選択が交差する事例を扱った。ネワール語の移動表現で最も頻繁に使われる動詞の拡張用法の中に、生理現象の表出があった。また、日本語の生理現象表出でも移動動詞が使われていた。これらは移動のスキーマに基づく概念化という点で共通し、path 内の異なる要素がプロファイルされ、ネワール語では deictic center を表す動詞を用い、その現象が話者に到達するというレベルで語彙化される。日本語でも移動のスキーマに依拠するが、体を容器に見立ててその表面に症状がでるといった container metaphor を介して語彙化が行なわれ、話者は直接介在しないことになる。

8. まとめ

本稿では、ネワール語の waye の本動詞用法に着目し、移動動詞としてだけでなく、降雨現象、生理現象の発生、記憶の焼付けまで意味することを見た。この意味拡張を捉えるには、移動のイメージスキーマを基盤として、移動を構成する複数の要素の属性がプロトタイプ的に広がり、多くの事象を指すことができるが、同時に制約も掛かることを議論した。また、日本語の「出る」の用法の一部に、waye とほぼ同じ生理作用の発生を表す用法があり、両言語とも移動のスキーマを用いてこの現象を表すという共通性があることを論じた。

<略号一覧> ERG 能格 ABS 絶対格 ABL 奪格 GEN 属格 DAT 与格 INST 道具格
 LOC 所格 PREF 接頭辞 NL 名詞化語尾 PL 複数形 PC 自分形過去 PD
 他人形過去 NPC 自分形非過去 NPD 他人形非過去 ST 状態形 CP 接
 続形 CAUSE 使役形 IMP 命令形

注

1. 霜の場合は *pugāye* (霜が降りる) という動詞がある。英語では逆に、主語は形式主語 *it* で表示され、天候事象の特定化は動詞によってなされる。
2. 日本語の本動詞としての「いく」「くる」の用法にも、事態の進行、状態、程度、度合いに達する等がある。(事態がここまで来たら、順番がきた、作品が見られるところまで行ってない、批評できる段階まで来てない、等) 人間の内的状態を表す場合も「震えがきた、発作がきた」等が観察されるが、ネワール語の方が拡張の範疇がはっきりしていると言える。(参考図書：基礎日本語辞典、日本語基本動詞用法辞典)
3. *conjunct/disjunct* 形の区別は、1 人称主語で動作性の動詞が使われる場合 *Conjunct* 形を取り、それ以外では *disjunct* 形となる区分を表す。制御的で、意図的な事態で、1 人称主語の場合にのみ *conjunct* 形が現れることから、話者の事態への関わり・確信・認識の具合が文法形式に表れるとみられることもできる。本稿 3 節・4 節で扱っている内的状況は 1 人称主語でも *disjunct* 形で表される。
4. ネワール語では、接触・打撃動詞の目的語の格が有生性によって交替する。

(1) a. <i>Ji~ rāma-yāta dāyā.</i> I-ERG Ram-DAT hit-PC 私はラムを叩いた	b. <i>Ji~ tebl-e dāyā.</i> I-ERG table-LOC hit-PC 私はテーブルを叩いた
(2) a. <i>Rāma~ khicāyāta thila</i> Ram-ERG dog-DAT touch-PD ラムは犬に触った	b. <i>Rāma~ kap-e thila</i> Ram-ERG cup-LOC touch-PD ラムはコップに触った

上の(1)(2)が示すように人間など有生の目的語の場合は与格で表れ、無生物の場合は場所格で現れる。ただし、人間の体の部位が目的語になる場合は場所格で表示される。
- (3) *khica~ puli-i nyāta*
 dog-ERG knee-LOC bite-PD
 犬がひざに噛み付いた (着点は LOC で表示)
5. 表一 1 には挙がっていないが、(7b)の感情動詞の内、*ludhane* (食事をして満足する) では *man-e*, *nuga:l-e* (心で) というような場所格表現が取れる。ここでは感情のありかを場所として捉えていることになる。

謝辞：

協力者のプルナ・ラタナ・サッキヤさんは今回も有益なネワール語資料を提供してくださった。変わらぬご協力に感謝します。

また、西光先生には長い間に渡ってお世話になっています。はるか昔、修士論文の準備中に、先行研究の主張を理解するだけでは充分でなく、独自のデータの採取と分析が必要だと調査を促して下さったのは西光先生でした。その後、神戸を離れた後もネパールでのデータ収集にも力を貸して下さいました。しばらく中断した後、またこのように言語研究に取り組むことができますのも、先生のお力添えがあったからと深く感謝しております。本来ならばこのような機会にもっとお手伝いしなければならぬはずなのですが、力不足のため、小論文の寄稿のみで済ませておりますことを恥ずかしく感じます。近い将来これまでの結果をまとめてご報告できますよう、精進いたします。

参考文献

- Croft, W. 1993. Case marking and the semantics of mental verbs. In J. Pustejovsky (ed.) *Semantics and the lexicon*. 55-72. Dordrecht: Kluwer.
- Hargreaves, D.J. 1991. *The concept of intentional action in the grammar of Kathmandu Newari*. Ph.D. dissertation. The University of Oregon.
- _____. 2005. Agency and Intentional Action in Kathmandu Newar. *Himalayan Linguistics*. 5. 1-48.
- 今泉志奈子・郡司隆男 2002. 「語彙的複合語における複合事象」伊藤たかね(編)『レキシコンと統語論の接点』東京大学出版会
- Johnson, M. 1987. *The body in the Mind: The bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago and Lobdon: The University of Chicago Press.
- Kölver, L. and Shresthacarya, I. 1994. *A Dictionary of Contemporary Newar*. Bonn: VGH Wissenschaftsverlag
- Kövecses, Z. and Radden, G. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9-1, 37-77.
- Kiryu, K. 2001. Types of Verbs and Functions of the Causative Suffix -k in Newar. *Kobe Papers in Linguistics*. Vol. 3. 1-9. Department of Linguistics. Kobe University.
- 桐生和幸 2002. 『ネワール語文法』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 小泉保・他(編) 1989. 『日本語文型辞典』大修館書店
- 松本曜(他) 2003. 『認知意味論』大修館書店
- 松本曜(他) 2005. 「経路の多様性と移動表現のタイポロジー」第30回関西言語学会ワークショップハンドアウト 関西言語学会
- Matsuse, I. 2000. 'Wane (to go)' and 'Waye (to come)' in the Newar language: Their Basic use and Extension. *KLS-20 Kansai Linguistic Society Cognitive Linguistics in the Redwoods*. pp.425-458. Berlin:Mouton de Gruyter.
- 森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』角川書店
- Talmy, L. 1985. Lexicalization Patterns: Semantic structure in lexical forms. In *Language typology and syntactic description Vol. III: Grammatical categories and the lexicon*, ed. Timothy Shopen, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 1991. "Path to Realization," *BLS* 17, 480-517
- _____. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA:MIT Press

